

充実の秋へ！一つ一つの取組を確かな成長の節に！

校長 松本 雅史

金木犀香る季節となりました。保護者の皆様におかれましては、日頃より本校の教育活動にご理解とご協力をいただき、心より感謝申し上げます。

今年の中秋の名月は、9月25日でした。10月に愛でる月は「十三夜（じゅうさんや）」の月です。十五夜が中国から伝わったのに対し、十三夜は日本独自の風習で、収穫に感謝を捧げる「栗名月」や「豆名月」とも呼ばれます。満月手前の少し欠けた月を愛でるこの風習には、完成された美しさだけでなく「これからの変化を楽しむ」という日本人の奥ゆかしい感性が込められているといえます。

先月には、6年生の移動教室がありました。「楽学両道——一致団結」をスローガンに頑張った2泊3日でした。お世話になった方々に感謝を伝えるだけでなく、「出会った方々に笑顔を広げる私たちであろう」と一つ一つの出会いを大切にしていきました。この2泊3日を通して、着実に成長していく6年生の姿に、最高学年生としての頼もしさを強く感じました。6年生が留守の間、学校を支えたのは5年生でした。1年生の掃除のお手伝いなど、上級生として模範の姿を示そうと力を尽くしました。こうした使命感こそ活躍と成長を支える源ですね。

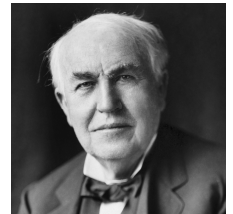


さて、10月は、子どもたちにとって挑戦が続く月です。日々の学習、運動会などの行事を通して、仲間と力を合わせることの難しさと楽しさ、自分の役割を果たす責任感、最後までやり抜く粘り強さを培っていきます。

ところで、「挑戦」の大切をとかく私たち大人は、強調します。しかし、こどもの挑戦や問題解決に対してどう支援しているかと言えば、できる限り失敗しないように、上手にできるように、傷つかないようにと配慮をめぐらせ、先回りをしようとさえします。「できる・できない」に強くこだわり、できなかったことを責めてしまうこともあるかもしれません。それは、教育のプロといわれる教師でさえその傾向を否定できません。しかし、準備された成功体験で固められた自信とプライド、それで本当に未来を自分の力で切り開く逞しい人に成長できるでしょうか。

発明王として名高いトーマス・エジソンは、こんな言葉を残しています。

「私は失敗したことがない。ただ1万通りの上手くいかない方法を見つけただけだ。」
(I have not failed. I've just found 10,000 ways that won't work.)



「今の子は失敗慣れしていない」と、失敗に対する耐性のなさ、失敗経験自体の大切さをいう人がいます。確かに「失敗」に出遭うことで、失敗したときに自分自身がどういうマインドになるのかを自覚することには価値があります。「失敗」や「問題」と出遭ったとき、それを「いい学びをした」と「自分自身をよりよく成長させるチャンス」と捉えられるかどうかで、その後の人生は大きく変わるからです。

エジソンのように「失敗から学び、失敗を成長の糧にする」この飽くなきチャレンジ精神は、ただ「失敗を恐れるな」と単純に挑戦を繰り返すことによって磨かれるものとは私は考えません。仮に失敗しても、それでも前に進みたい・成長したいという自分自身へのわくわくした期待感、やり遂げずにはおくものかという強い意志と使命感がその心根にあることが大切なのではないかと私は考えます。そのマインドを学校と家庭と地域とで豊かに育んでいきたいです。

「実りの秋」にふさわしく、一人一人が確かな成長の手応えをつかめるよう、教職員一丸となって取り組んでまいります。どうぞよろしくお願いいたします。